

## 現代カトリック家系に伝わる「先祖書き」について — 比較から見たバスチャン伝説との関連性への試論 —\*

加藤久雄\*\*、白濱聖子\*\*

"Lore of hidden Christians" that remains in modern Catholic family

Hisao KATO and Satoko SHIRAHAMA\*\*

### キーワード:

潜伏キリシタン、バスチャン伝説、「先祖書き」

### はじめに

2009年五島市平蔵町のN氏から著者の一人である加藤が、この「先祖書き」に関する検証を依頼された。現代のカトリック家系に伝わる「先祖書き」は、以下に記す理由から、大村領の外海地区から移住した潜伏キリシタン時代の伝承であると判断された。

この史料は、1895年に亡くなった現所有者からの4代前の祖先が書いたと伝わっているものである。別稿で準備中であるが、その祖先は、ほとんどの五島の潜伏キリシタンの動きのように、大村藩の外海地域から移住したということが(木場田1975, 1991; 鳥巢2009; 生き生きおおむら推進会議2009)、同じところに保管されていた三代書きに記されている。ゆえに、この家系は、潜伏キリシタンからカトリックに復帰した家系といえる。一般に、潜伏キリシタンからカトリックに復帰する場合、潜伏キリシタン時代の情報を資料と

して残すことはない。そのような意味で非常に珍しい史料である。

「先祖書き」の内容を読んでみると、ある伝説の内容と類似した点が数多くあることに気付いた。いわゆるバスチャン伝説である。また、この「先祖書き」にとってもよく似ている文献がある。同じ福江島の奥浦地区堂崎で残っていた『山本家文書』にある「先祖の遺言」である。我々はこのバスチャン伝説・『山本家文書』の「先祖の遺言」と「先祖書き」を詳細に比較することで、潜伏キリシタンの伝承の様相を探ることができるのではないかと考えた。ゆえに、本稿では、「先祖書き」とバスチャン伝説・『山本家文書』の「先祖の遺言」を比較し、類似点や相違点を明らかにすることで、「先祖書き」を通した潜伏キリシタンの伝承について考察したい。

### 1. 「先祖書き」

「先祖書き」は、A4に近い大きさの和紙に毛筆で6枚にわたって書かれている。まずはその原文を示す。

原文(番号は便宜的にふっている)

②  
セイフランセスコノスエニオリタル  
人ミカヘルトイフヒトガユイゴンニ  
天主教ヲマモルタメニカンゴクニ  
イレラレタライノチヲタスケル  
タメニユニカヘルナイキテシニマサ  
ルハジアル  
モシヤク人ノメヲノガレタラ  
ヒラドシマヨリゴトチニユキノコリノ  
キヨダイトマゴドモツレテ天主ノ  
十ツカイトセイクワイノオキテ七ツノ  
ザイケントマモラセサイゴノトキワ  
ツクワイヲオコサヨソスレバ

①  
ソ  
セ  
ン

\* Received February 1, 2014

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 経済政策学科、Department of Economic Policy Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

③  
六ト五ト七トワケテコレニソ  
ヤウニツトメテオリマスレバタス  
カリマシヨコレカラ六七メニワカラノ  
クニヨリパテルトイフモノガクロフネ  
ニノリテクルカラソノオシヘニシタガヘ  
ヨトイーマシタソレカラ七ネン  
モカンゴクニオカレ四年ワシンセキ  
ヨリヨルタベモノヲモツテキマシタ  
カタクキンゼレイルフガテキマセヌ  
カンゴクノクサヲクイマシタソレデ  
十ベンアマリモセメニアイマシタ  
一ドモステマセンソノトキコテイガ

④  
ザンコクニシテセメサスガサムライ  
ジサセヨトイーマシタワタク  
シドモワ天主教ヲホウズルモノ  
ナレバワガコモ人ノコモコロシマセヌ  
ナンジラノテニコロセヨトイーマシタ  
ツマノマリアトイフモノガステ  
シンタデナイカトオモイマキノニ  
ユキヒルワヤマニシバゴヤツクリ  
コーテオシヘヨルワカイエノサシキニ  
三尺マヲツクリテイノリ九いま  
(著者注「万か」)  
九千センベントナヘタレイコンガ

⑤  
アラワレテソナニシンバイセズト  
ヨロシワタクシトモワイノチモ  
タカラモクライモミナステ  
サ、ゲタカラスグ天国ヘユキ  
マシタアンシンナサイトイーマシタソ  
ナデマシタ  
六タイメノマゴニモイーマシタ  
セイフランセスコノスエニイマノ  
シンプサマノゴトクノシンプサマガタ  
トオリマシタサツマノハタモト  
トヨリ大村トノサマヘウツサレ  
十年カンアンシンテツトメタ

⑥  
ソノトキノコーテイガザンコクデ  
十ベンモセメニアイマシタ一ドモ  
ステマセンオクノタカラモクライ  
モステ、イノチヲサ、ゲマシタ  
スグ天国ヘユキマシタソレデ  
ヨクマモレヨト

「先祖書き」には主に、聖フランシスコの後の時代に生まれたミカエルという人の遺言、ミカエルが監獄に入れられた時のこと、そして、妻のマリアが亡くなって靈魂が現れたことが書かれている。遺言の内容は、役人に見つかった時と、役人の目を逃れた時の2つに分けて書かれている。そして、遺言の後半には、司祭が黒船に乗ってやってくることも書かれている。監獄に入れられた時の状況では、親戚が食べ物を持ってきてくれたこと、侍から自殺を迫られたことが書かれている。妻のマリアが亡くなった時は、祈りをささげていると靈魂が現れて慰められたことが書かれている。平戸や五島、大村、牧野など現存する地名が出てくるのも特徴である。

## 2. バスチャン伝説

今回比較の対象となったバスチャン伝説について内容を示す(松村管和／女子カルメル修道会＝共訳 1996；浦川和三郎 1927ほか)。

バスチャン伝説とは、バスチャンがある司祭の

伝道師となり、キリスト教の暦の繰り方や教理を各地に伝えたという伝説である。現長崎市の深堀近くの平山で生まれたバスチャンは、カトリックに改宗し、ある司祭の伝道師となる。ところが、その司祭は死んでしまい、キリスト教の暦をどのように作ったら良いのかわからなかったバスチャンは、断食をしてその司祭に作り方を教えてくれるよう願った。すると、司祭が天から下りて来て暦のつくり方を教えたのだ。暦のつくり方を会得したバスチャンは、主に大村藩の領地である赤首(現長崎市外海)にいった。その後、迫害の手が迫ってきたので、同領地の牧野(現長崎市外海)に身を隠す。しかし、かまどの煙が災いして異教徒に見つかってしまう。そして、役人に引き渡され、長崎の桜町の牢に3年3か月入れられ、78回の拷問を受けた後、首を斬られ殉教した。そして、バスチャンは死ぬ前に以下の4つの事柄について遺言を残した。

1. 七代の子孫までは家族と見なすが、その後は救われるのは困難である。

2. その時期になると、贖罪司祭が大きな黒船に乗ってくるから、毎週信仰を告白することが出来るようになる。
3. その時期になると、どこでもキリスト教の教えを謳歌できるようになる。
4. その時期になると、道で異教徒に出遭っても、私たちが道を譲る前に、彼らが道を譲るだろう。

以上の内容がバスチャン伝説の概要である。

### 3. バスチャン伝説との比較

原文とバスチャン伝説には、「司祭が黒船に乗ってやってくるという遺言」や「靈魂が現れてやり取りをするという内容」、そして「大村」という地名など、似ている点がいくつかあることがわかる。そこで、『パリ外国宣教会年次報告』と『切支丹の復活』の中に掲載されているバスチャン伝説と「先祖書き」を比較してみることにした。比較することで、類似点と相違点が明らかになるように表にまとめた。

表－1 「先祖書き」と参考文献との比較

	原文	参考文献		原文と比べての類似点・相違点
		パリ外国宣教会年次報告	切支丹の復活	
①	ソセン	バスチアンの末裔である畑坑 (H a t a k u k i) (P.157/L.32～33)	自分が是まで肌身を離さず大切に守つて來た聖物があるから、之を娘の夫なる出津 <sup>シツツ</sup> の重次と云ふものに届けて貰ひたいと願ひ出た。(P.308/L.2～4)	バスチャンの子孫がいることはわかっており、自分の子孫に遺言を残したことがバスチャン伝説からもうかがえる。
②	セイフランセスコノスエニオリタル 人ミカヘルトイフヒトガユイゴンニ	次に掲げるのが我々の英雄の物とされている予言である。(P.157/L.34)	バスチアンは死ぬ前に四つの事を豫言したと云ふ。(P.308/L.14)	「聖フランシスコ」「ミカエル」という単語は出て来ていない。しかし、予言を残したという点は同じである。
	天主教ヲマモルタメニカンゴクニ イレラレタイノチヲタスケル タメニイエニカヘルナイキテシニマサルハジアル	桜町の牢に投ぜられ三年三か月そこにいた。彼は78回の尋問を受けて後、首を斬られた。(P.157/L.28～29)	櫻町の監獄に三年三月の間、囚れの身となり、七十八回も拷問を受けた上で、斬罪に處せられた。(P.308/L.1～2)	原文の教えのようにバスチャンは生きて家に帰ることはなかった。
	モシヤク人ノメヲノガレタラ ヒラドシマヨリゴトチニユキノコリノ キヨダイトマゴドモツレテ天主ノ 十ツカイトセイクワイノオキテトセツノ ザイケントマモラセサイゴノトキワ ツクワイヲオコサヨソスレバ	なし	六百三人もの切支丹が捕へられ、百人だけは放免となつたが、残餘は大村、佐賀、平戸、島原等で斬罪に處せられた。(P.307/L.5～1.7)	内容が合うような箇所はないが、平戸という地名は出てくる。

③	六ト五トセトワケテコレニソ ヤウニツトメテオリマスレバ タス カリマシヨ	私は汝らを七代目までは家族の者と見なす。 その後、救われるのは困難であろう。(P.157/1.35～1.36)	一、汝等を七代までは我子と見做すが、夫れから後は救霊が六ヶ敷くなる。(P.309L.1)	「七代目までを家族と見做す」を「七代目までは祖先の言ったことを守るように」と解釈すると内容が似ている。
	コレカラ六七メニワカラノ クニヨリパテルトイフモノガ クロフネ ニノリテクルカラソノオシヘ ニシタガヘ ヨトイーマシタ	しかし、聴罪司祭たちが大きな船に乗ってやってくるから、汝らは毎週告白することができるようになる。(P.157/L.37～1.38)	二、聴罪司祭 <sup>コンエソーロ</sup> が大きな黒船 <sup>コンビサン</sup> に乗って来ると、毎週でも告白を申すことが出来る。(P.309/L.2)	どこから来るかや、誰が来るかという点については違うが、内容は同じである。
	ソレカラセネン モカンゴクニオカレ	桜町の牢に投ぜられ三年三か月そこにいた。(P.157/L.28～1.29)	櫻町の監獄に三年三月の間、囚れの身となり(P.308L.1)	年数が違う。
	四年ワシンセキ ヨリヨルタベモノヲモツテキ マシタ カタクキンゼレイルフガテキ マセヌ カンゴクノクサヲクイマシタ ソレデ	なし	なし	監獄にいた時の状況は書かれていない。
	十ベンアマリモセメニアイマ シタ	彼は78回の尋問を受けて後、首を斬られた。(P.157/L.29)	七十八回も拷問を受けた上で、斬罪に處せられた。(P.308/L.1～1.2)	拷問を受けた回数が違う。
	一ドモステマセン	彼は78回の尋問を受けて後、首を斬られた。(P.157/L.29)	七十八回も拷問を受けた上で、斬罪に處せられた。(P.308/L.1～1.2)	バスチャンが処刑されているということは、原文のように一度も教えを捨てなかったことを意味していると言える。
④	ソノトキコテイガ ザンコクニシテセメサスガ	かまどの煙が災いして、彼は遠見岳（Tomidake）の異教徒に発見され、役人に引き渡された。(P.157/1.23～1.25)	・安政三年、浦上の三番崩れが端なくも檜山に飛火して茂重騒動となるや、今にも深堀から役人が出張して神山の樹を残らず斫り倒す。(P.306/1.12～13)	キリシタンに対して厳しい態度であったことがバスチャン伝説からもうかがえる。

④			<ul style="list-style-type: none"> <li>• 偶ま一六五七年（明暦三年）の郡崩れが起り、大村の郡村（今の竹松、福重、松原、萱瀬村を合せたるもの）では六百三人もの切支丹が捕へられ、百人だけは放免となつたが、残餘は大村、佐賀、平戸、島原等で斬罪處せられた。大村では餘り多くの首を刎ねたが爲に、切手が疲れて刀を振ふことが出来ない。終には生きながら蓆に包んで海底に沈めたとかで、夫れが内海の海岸に流れ着いた。（P.307/L.4～1.8）</li> <li>• 幸いバスチアンの隠家は随分奥まつた谷底に在つたので、長らく人目を忍ぶことが出来た。然し終には家から立ち昇る夕餉の煙によつて遠見嶽の異教徒に發見された。（P.307/L.10～1.13）</li> <li>• 三代將軍家光が前代未聞の大迫害を起して、日本の山も川も殉教者の鮮血を漂はせた。（P.309/L.13～14）</li> </ul>	
	サムライ ジサスセヨトイーマシタワタク シドモワ天主教ヲホウズルモノ ナレバワガコモ人ノコモコロシマセヌ ナンジラノテニコロセヨトイーマシタ	なし	なし	尋問された時の内容は書かれていない。

④

ツマノマリアトイフモノガス テ シンタデナイカトオモイ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 中川 (N a g a g a w a) の小川に沿って行く途中、彼は出津へ麦を買いに行つて戻ってくる妻に会ったが彼らは一言も交わさずにすれちがったのである。(P.157/L.25～1.27)</li> <li>• ところが司祭ヨハネは死んでしまったのだ。(P.157/L.9～10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 縄にかゝつて濱に引き下される途中、妻と行遇つたけれども、互に物言ひ交はすことも出来ず、たゞ胸<sup>メクバセ</sup>して悲しい訣別を告げた。(P.307/L.13～1.14)</li> <li>• ジワンがもう自分は國へ戻る、と言つて何處にか姿を隠して了つた。(P.305/L.4～5)</li> </ul>	妻に関する記事はバスチャン伝説にもある。しかし、バスチャン伝説では妻は亡くなっていない。 一方でバスチャンの師匠である神父がなくなったという記述がある。
マキノニ ユキヒルワヤマニシバゴヤヲ ツクリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ヨハネという名の司祭の伝道師になったバスチアンは池島、赤首 (A b a k u k i)、牧野 (M a k i n o) で働いた。(P.157/L.8～1.9)</li> <li>• 迫害の手に追跡されたバスチアンはついに、牧野 (M a k i n o) の頂に身を隠した。(P.157/L.22)</li> </ul>	バスチアンは猶も熱心に傳道を續けて居ると、探偵の手が段々身に迫つて來たので、檜山にも居堪らず、遁れて黒崎村牧野の岳の山と云ふ所に隠れた。(P.307/L.3～1.4)	活動した地域は同じだが、柴小屋を作った記述はない。
コーテオシヘ	伝道師になったバスチアンは池島、赤首 (A b a k u k i)、牧野 (M a k i n o) で働いた。(P.157/L.8～9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 兎に角バスチアンはジワンの弟子となり、共に福田村の小江、手熊などに隠れて教えを説き(P.305/L.3)</li> <li>• バスチアンはその教えに基いて曆を作り、各地を巡回して道を傳へ、終に三重村の檜山に辿り着いた。(P.305/L.14～P.306/L.1)</li> <li>• バスチアンは猶も熱心に傳道を續けて居ると(P.307/L.3～1.4)</li> </ul>	頼まれているかわからないが、バスチャンは様々なところに教えを広めている。
ヨルワワカイエノサシキニ 三尺マヲツクリテイノリ	なし	なし	「マキノニユキヒルワヤマニシバゴヤヲツクリ」の部分と対になっている。



④	<p>九いま（万か） 九千センベントナヘタレイコ ンガ アラワレテ</p>	<p>キリスト教の暦はどの ように作ったら良いの か解らないバスチアン は、断食をし、最後の 21日目に司祭ヨハネが 天から下りて来て、 (P.157/L.10～1.12)</p>	<p>そこで二十一日間も断 食し、煮たものは一切 食べず、非常に身を苦 めて、『今一度歸つて 教へて下さい』とジワ ンに願つたら、ジワン も願いに應じて再び何 處からか戻つてきた。 (P.305/L.7～1.9)</p>	<p>9万9千回祈りを 唱えたかはバス チャン伝説には書 かれていない。霊 が現れた点は同じ だが、バスチャン 伝説では靈魂では なく司祭ヨハネ (ジワン) が現れ ている。</p>
⑤	<p>ソナニシンバイセズト ヨロシワタクシトモワイノチ モ タカラモクライモミナステ サメゲタカラスグ天国ヘユキ マシタアンシンナサイトイー マシタソ ナデマシタ</p>	<p>彼に、お告げの祝い日 から暦を始めるべきこ と、この日が四旬節の 真中にあたり、異教徒 の暦にしろされている 彼岸の中日、又は春分 の頃であることを教え た。神父はバスチアン と水盆を交わしそれか ら天に戻っていった。 (P.157/L.12～1.14)</p>	<p>『お前も分らぬ男だ ね。佛法に彼岸の中日 と云ふのがあるだら う。あれに御告の祝日 を合せて、悲の節の眞 中になるやうに繰れば きちんとあうのぢや。』 と教へ、バスチアンと 離別の水杯をして濱邊 に下り、海上を歩いて 遠く波間に消え失せて 了つた。(P.305/L.10～ 1.12)</p>	<p>司祭ヨハネ（ジワ ン）が出てきて話 した内容やおこな いが、靈魂（妻の 靈魂か？）が現れ た原文と異なる。</p>
	<p>六タイムノマゴニモイーマシ タ</p>	<p>なし</p>	<p>なし</p>	
	<p>セイフランセスコノスエニイ マノ シンプサマノゴトクノシンプ サマガタ トオリマシタ</p>	<p>カトリックに改心し、 神ノ島の向かいにある 小江（K o y e）か手 熊（T e g u m a）に 住んでいたヨハネとい う名の司祭の伝道師に なったバスチアンは池 島、赤首（A b a k u k i）、牧野（M a k i n o）で働いた。 (P.157/L.7～9)</p>	<p>バスチアンはこのジワ ンの弟子となって傳道 に盡したと云ふのであ るから、(P.304/L.1) 兎に角バスチアンはジ ワンの弟子となり、 (P.305/L.3)</p>	<p>神父と一緒にいた という記述はバス チャン伝説にもあ る。</p>
	<p>サツマノハタモト トヨリ大村トノサマヘウツサ レ 十年カンアンシンテツトメタ</p>	<p>バスチアンは暦を作 り、その後、大村藩主 の領地である赤首（A b a k u k i）へ行っ た。(P.157/L.15～1.16)</p>	<p>バスチアンはその教え に基いて暦を作り、各 地を巡回して道を傳 へ、終に三重村の檜山 に辿り着いた。檜山に 赤岳と云ふ山があり、 (P.305/L.14～P.306/L.1)</p>	<p>バスチャン伝説に も大村領に住んで いた記述はある が、何年住んでい たかわからない。 さらに、薩摩から ではなく小江や手 熊から大村に移っ ている点も原文と 異なっている。</p>

⑥	ソノトキノコトイガザンコ クデ	かまどの煙が災いし て、彼は遠見岳（T o m i d a k e）の異教 徒に発見され、役人に 引き渡された。（P.157/ 1.23～1.25）	安政三年、浦上の三番 崩れが端なくも檜山に 飛火して茂重騒動とな るや、今にも深堀から 役人が出張して神山の 樹を残らず斫り倒す （P.306/1.12～13） 偶ま一六五七年（明暦 三年）の郡崩れが起 り、大村の郡村（今の 竹松、福重、松原、萱 瀬村を合せたもの） では六百三人もの切支 丹が捕へられ、百人だ けは放免となつたが、 残餘は大村、佐賀、平 戸、島原等で斬罪處せ られた。大村では餘り 多くの首を刎ねたが爲 に、切手が疲れて刀を 振ふことが出来ない。 終には生きながら蓆に 包んで海底に沈めたと かで、夫れが内海の海 岸に流れ着いた。 （P.307/1.4～1.8） 幸いバスチアンの隠家 は随分奥まつた谷底に 在つたので、長らく人 目を忍ぶことが出来た。 然し終には家から 立ち昇る夕餉の煙によ つて遠見嶽の異教徒に 発見された。 （P.307/1.10～1.13） 三代將軍家光が前代未 聞の大迫害を起して、 日本の山も川も殉教者 の鮮血を漂はせた。 （P.309/1.13～1.14）	キリシタンに対し て厳しい態度で あったことがバス チャン伝説からも うかがえる。
	十ベンモセメニアイマシタ	彼は78回の尋問を受け て後、首を斬られた。 （P.157/1.29）	七十八回も拷問を受け た上で、斬罪に處せら れた。（P.308/1.1～1.2）	拷問を受けた回数 が違う。



⑥	一ドモ ステマセン	彼は78回の尋問を受けて後、首を斬られた。 (P.157/L.29)	七十八回も拷問を受けた上で、斬罪に處せられた。 (P.308/L.1～1.2)	バスチャンが処刑されているということは、原文のように一度も教えを捨てなかったことを意味していると言える。
	オクノタカラモクライ モステイノチヲサゲマシ タ	彼は78回の尋問を受けて後、首を斬られた。 (P.157/L.29)	七十八回も拷問を受けた上で、斬罪に處せられた。 (P.308/L.1～1.2)	命をささげたという事はバスチャン伝説からもわかる。
	スグ天国ヘユキマシタ	神父はバスチアンと水盆を交わしそれから天に戻っていった。 (P.157/L.114)	バスチアンと離別の水杯をして濱邊に下り、海上を歩いて遠く波間に消え失せて了つた。 (P.305/L.11)	バスチャン伝説では、神父が天国に帰る時の内容は書いてあるが、バスチャンに関しては書かれていない。
	ソレデ ヨクマモレヨト	なし	たゞその捕へられたのが月の二十日で、殺されたのが二十三日、此二日だけはどんなことがあつても忘れてはならぬとバスチアンも遺言したとかで、(P.309/1.6～8)	原文と同じように「忘れてはならない」や「守るように」と書かれていたのはこの箇所だけだった。

※旧漢字で表記できないものは、太字で示した。

「先祖書き」と「バスチャン伝説」との比較から以下の7つのことが明らかになった。

- ①「先祖書き」のミカエルが遺言を残したように、バスチャンも遺言を残している。「先祖書き」の中の遺言にあった役人に捕まった時や役人の目を逃れた時に取るべき行動については、バスチャンの遺言にはない。しかし、殉教したバスチャンの行動は、「先祖書き」の中の遺言に書かれていた行動とよく似ている。
- ②司祭が黒船に乗ってやってくるという遺言の内容は、バスチャンの遺言にもあった。しかし、どこから来るのか、誰が来るのかといった点に関しては異なっている。
- ③監獄に入れられたという内容はバスチャン伝説にもあった。しかし、監獄にいた間の出来事に関してはバスチャン伝説には書かれていない。さらに、監獄にいた期間や、尋問された回数も異なっていた。
- ④霊魂が現れてやり取りをしたという内容はバスチャン伝説にもあった。しかし、霊魂を呼んだ目

的や、霊魂と交わした言葉が異なる。

- ⑤「先祖書き」に牧野に柴小屋を作ったという記述があるが、バスチャン伝説によるとバスチャンは牧野に身を隠していた。また、「先祖書き」に大村に10年間住んだという記述があるが、バスチャンも主に大村領である池島、赤首、牧野で信仰を広めている。このように、「先祖書き」のミカエルと、バスチャンの行動範囲が重なる点がある。
- ⑥全体的に、内容が似ているという点は多かったが、ミカエルなどの固有名詞や、監獄にいた期間などの細かい点は違っていたことが多かった。
- ⑦大村、平戸や牧野など、「先祖書き」にもバスチャン伝説にも出てくる地名があった。

#### 4. 『山本家文書』の「先祖の遺言」

今回の「先祖書き」に似た文献に『山本家文書』の「先祖の遺言」がある。(木場田1991)

この遺言は、天主教を守るために殉教したミカ

エルの遺言が書かれている。遺言の内容は3つある。まず1つめは、宗教のことで監獄に入れられたら、潔く犠牲になること。2つ目は、役人の目を逃れることができたなら、平戸か五島に移住し、天主の十戒と七つの罪源を守らせ、最後のときには痛悔を起こさせること。3つ目は、7代目には唐の国から黒い船に乗って神父が来ることである。

また、この「先祖の遺言」を書いたと思われる人物の妻が、母とちじ姉にこの遺言を託して亡くなったことも書かれている。さらに、ミカエルは、大村領主が薩摩領主の旗本から養子としてもらってきた人物であることも書かれている。

以上が「先祖の遺言」の内容である。

#### 5. 『山本家文書』の「先祖の遺言」との比較

「先祖書き」と『山本家文書』「先祖の遺言」には、ミカエルの遺言の内容や、侍に自殺を迫られたことなど、内容がとてもよく似ている。そこで、『山本家文書』「先祖の遺言」と「先祖書き」を比較してみることにした。比較することで、類似点と相違点が明瞭になるように表にまとめた。今回は、相違点を中心にまとめている。

表ー2 「先祖書き」と『山本家文書』の「先祖の遺言」との比較

	原文	血と涙と信仰の島 五島列島その昔	原文と比べての相違点
①	ソセン	大センゾウ、(p.138 下段1.7)	「祖先」と「大先祖」という記述が異なる。
②	セイフランセスコノスエニオリタル 人ミカヘルトイフヒトガユイゴンニ	ミカエルトイフ人ガイフイゴンデアル。(p.139 上段1.10)	「聖フランシスコ」の後の時代に生まれたという記事がない。しかし、ミカエルが予言を残したという記述はある。
	天主教ヲマモルタメニカンゴクニ イレラレタライノチヲタスケル タメニイエニカヘルナイキテシ ニマサルハジアル	カンゴクニイレラレタラ、イノチヲ タスクルタメニイエニカヘルルナ。 イキテシニマサルハジアル。(p.138 下段1.17～19)	監獄に入れられる理由がない。
	モシヤク人ノメヲノガレタラ ヒラドシマヨリゴトチニユキノ コリノ キヨダイトマゴドモツレテ天主 ノ 十ツカイトセイクワイノオキテ トセツノ ザイケントマモラセ	モシヤク人ノメヲノガレタナラバ、 コドモ、マゴドモヲツレテ、ヒラ ド、ゴトニツレテイテ、天主ノ十カ イト、セツノザイゲント、ヨクマモ ラセ、(p.138 下段1.19～p.139 上段1.4)	聖会の掟が書かれていない。
	サイゴノトキワ ツクワイヲオコサヨソスレバ	サイゴノトキワ、ツウクワイヲオコ サセヨ。(p.139 上段1.4)	命令形ではない。
③	ハト五トセトワケテコレニソ ヤウニツトメテオリマスレバタ ス カリマシヨ	ソノトヲリスレバ、タスカルマシヨ。 (p.139 上段1.6)	「ハト五トセトワケテ」という記述はない。

③	コレカラ六七メニワカラノ クニヨリパテルトイフモノカク ロフネ ニノリテクルカラソノオシヘニ シタガヘ ヨトイーマシタ	コレカラセダイメニワ、カラノクニ カラ、クロイフネニ、パテルトイフ モノガキマス。ソノオシヘニシタカ イテ、タスカルヤウニト、(p.139 上段1.6～1.10)	「六七メニワ」と「セダ イメニワ」という点が違 う
	ソレカラセネン モカンゴクニオカレ	天主教ヲマモルタメニ、ナンベンモ セメニアイ、カンゴクニイレラレ、 ウエヲシノギ、(p.138 下段1.7～ 1.9)	監獄に入れられた年数 や、どのようにして飢え を凌いだのか、責めに あった回数などは原文の ように詳しく書かれてい ない。
	四年ワシンセキ ヨリヨルタバモノヲモツテキマ シタ カタクキンゼレイルフガテキマ セヌ カンゴクノクサヲクイマシタソ レデ		
	十ベンアマリモセメニアイマシ タ		
	ードモステマセン	天主サマヲイチトモステマセン、 (p.139 上段1.22～下段1.2)	「天主様」がある。
④	ソノトキコテイガ ザンコクニシテセメサスガ	なし	
	サムライ ジサスセヨトイーマシタワタク シドモワ天主教ヲホウズルモノ ナレバワガコモ人ノコモコロシ マセヌ ナンジラノテニコロセヨトイー マシタ	サスガサムライ、セツプクセヨトイ ワレタワタクシトモワ、天主教ホウ ズルモノデ、ケシテ、ジサツシマセ ン。人ノコモコロセマセン。ナンジ ラノ手ニテコロセトイウテ、(p.138 下段1.9～1.15)	「ジサスセヨ」が「セツ プクセヨ」となっていたり、「ワガコモ人ノコモ コロシマセヌ」が「ケシ テ、ジサツシマセン。人 ノコモコロセマセン。」 となっているなど若干表 現が違う。
	ツマノマリアトイフモノガステ シタデナイカトオモイ	コレワ、ワタクシノオカマガ、ワタ シノタメハハト、チジアネニタノン テシニマシタ。(p.139 上段1.14～ 1.16)	妻が登場し、亡くなった という点は共通してい る。
	マキノニ ユキヒルワヤマニシバゴヤヲツ クリ	なし	柴小屋を作り、祈ったと いう記述は見られない。
	コーテオシヘ	なし	
	ヨルワワカイエノサシキニ 三尺マヲツクリテイノリ	なし	
	九いま（万か） 九千センベントナヘタレイコン ガ アラワレテ	なし	霊魂が表れたという記述 はない。

⑤	ソナニシンバイセズト ヨロシワタクシトモワイノチモ タカラモクライモミナステサ ゲタカラスグ天国ヘユキ マシタアンシンナサイトイー マシタソ ナデマシタ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シンバイスルナ。天主ノオクニイテ オルト、(p.139 上段1.4.)</li> <li>・タカラモ、クライモ、イノチモササ ゲテイツモ、天主サマヲイチトモス テマセン、シニマシタソノツマニ ワ、母ニカシラセタ。(p.139 上段1.22 ～下段1.2)</li> </ul>	霊魂ではなく、母が知らせている。そして、撫でたという記述は見られない。
	六タイムノマゴニモイー マシタ	なし	
	セイフランセスコノスエニ マノ シンプサマノゴトクノシンプ サマガタ トオリマシタ	なし	
	サツマノハタモト トヨリ大村トノサマヘウツサ レ 十年カンアンシンテツトメ タ	コノミカエルトイフモノワ、大村主、 サツマ王ノハタモト、サツマヨリ ヨシニモロワレキタモノデアリ マシタ。 (p.139 上段1.18～1.20)	「十年カンアンシンテツトメ タ」という記述はない。
⑥	ソノトキノコーテイガザン コク デ	なし	
	十ベンモセメニアイ マシタ	ナンベンモセメニアイ、(p.138 下 段1.7)	回数までは書かれていない。
	ードモ ステマセン	タカラモ、クライモ、イノチモササ ゲテイツモ、天主サマヲイチトモス テマセン、(p.139 上段1.22～下段1.2)	天主教を捨てなかったことと、 宝も位も捨て命を捧げたことの順 番が逆になって書かれている。
	オクノタカラモクライ モステイノチヲサゲマシタ		
	スグ天国ヘユキマシタ	天主ノオクニイテオルト、(p.139 下段1.4)	天国に行ったという内容は同じ だが、表現が異なる。
	ソレデ ヨクマモレヨト	シソンワ、ヨクマモリテクダサ レヨ。(p.139 上段1.12)	「シソンワ」が入り表現が異なる。

「先祖書き」と『山本家文書』『先祖の遺言』との比較から以下の7つのことが明らかになった。

- ①「先祖書き」「先祖の遺言」ともに、ミカエルの3つの遺言の内容がほとんど同じである。
- ②「先祖の遺言」ではミカエルは薩摩領主の旗本で、大村領主の養子となったとある。「先祖書き」の後半には、「サツマノハタモトトヨリ大村トノサマヘウツサレ」とあり、ミカエルは薩摩の旗本で、大村の領主に養子として貰い受けられたと解釈でき、表現は異なるが、同じ内容だと思われる。
- ③「先祖書き」には監獄に入れられていた時に親戚が食べ物を持ってきたという記述があるが、

「先祖の遺言」にはない。しかし、責めにあい、飢えを凌いでいたという内容は共通している。

- ④「先祖書き」「先祖の遺言」共に、侍が自殺を迫る内容が全く同じである。
- ⑤「先祖書き」ではミカエルの妻が亡くなっているが、「先祖の遺言」では遺言を書いた人物の妻が亡くなっている。しかし、妻が亡くなっているという点では共通している。
- ⑥「先祖の遺言」には、牧野で柴小屋を作ったり、家に三尺間をつくって祈りをささげたりしたという内容はない。そして、霊魂（妻か？）が表れるという記述もない。

- ⑦ほとんどの内容がほぼ同じであるが、妻が亡くなった後の記述が大きく異なっていた。

## 6. 結論

「先祖書き」の前半部分では、ミカエルの遺言と、ミカエルが監獄に入れられ攻めにあったことが書かれている。前半の内容は、「先祖の遺言」の内容とほとんど同じであり、黒船に乗ってパテル（神父）が来るという遺言はバスチャンの遺言にもあった。

また、「先祖書き」の後半では、ミカエルの妻であるマリアが亡くなったと思い、牧野で柴小屋を建てて祈り、霊魂が現れたことと、ミカエルの出自が書かれている。祈りを捧げたことで霊魂が現れるという内容はバスチャン伝説によく似ており、ミカエルの出自に関しては「先祖の遺言」にも書かれていた。

このように、「先祖書き」にはバスチャン伝説と「先祖の遺言」の影響が想定できる。このことから、既に存在したミカエルの遺言の伝承にバスチャン伝説の内容が加わったと考えることができるし、またその逆で、バスチャン伝説の内容にミカエルの遺言の伝承が加わったとも解釈することができる。

潜伏キリシタンの伝承に関する史料・資料は現存するものがあまりない。さらに、本稿のように潜伏キリシタンの伝承に関する一次史料同士を比較した例も初めてである。そのような意味で、伝承の記述的な報告だけではなく、「先祖書き」をバスチャン伝説と比較した本稿は意義があると言える。

潜伏キリシタンの伝承の系統的調査を続けるために、今後、潜伏キリシタンの移住元である長崎市外海地区、移住経路と想定される江島、平島、上五島などで同様のことをおこなっていこうと考えている。

## 7. 参考文献

生き生きとおおむら推進会議（編）（2009年6月15日）『日本初のキリシタン大名 大村純忠の夢～いま、450年の時を超えて～』 株式会社つじ印刷

岩永静夫（1983年4月1日）『出津教会誌』 出津カトリック教会

木場田直（1975年5月25日）『西海の灯—五島

切支丹秘話—』 聖母の騎士社

木場田直（1991年10月1日）『血と涙と信仰の島 五島列島その昔』 真光社印刷

浦川和三郎（1927年12月28日）『切支丹の復活』 日本カトリック刊行会

鳥巢孝子（2009年5月31日）『信仰の里』 畑田直寿純編集・発行

松村管和／女子カルメル修道会（共訳）（1996年8月15日）『パリ外国宣教会年次報告 1 1846—1893』 聖母の騎士社



写真 長崎市指定文化財 バスチャン屋敷跡（長崎市外海町）

## 注

- 1) 五島家文書 『公譜別録拾遺』 長崎歴史文化博物館蔵。著者ら実物を未見。

